

シリア内戦と中東の国際関係

平成 26 年入学
派遣先国：ヨルダン
村中 美菜子

キーワード：シリア内戦，難民，生存基盤

対象とする問題の概要

2011 年から中東のシリアで続く内戦は、現代中東における最も深刻な問題のひとつである。発端は、2010 年末にチュニジアで始まり、瞬く間にアラブ世界に広がった民衆蜂起であった。シリアでの蜂起も当初は、政治改革を求める平和的な民衆デモであったが、政府側からの弾圧がエスカレートする中で反体制側にも武器をとる者が現れ、衝突が次第に暴力化したことで内戦状態となった。この内戦に国内外の様々な勢力が介入し、問題がますます複雑化しているのが現状である。また内戦は多数の犠牲者・避難民を生み出しており、シリア周辺諸国はこれまで多くの難民を受け入れてきた。さらに、移民希望のシリア人が大挙して欧州に押し寄せるなどして、新たな問題となっている。国際社会が対応を模索する中で、シリア内戦終結の兆しは未だ見えていない。

研究目的

本研究の目的は、シリア内戦がなぜ、どのようにして起こったのか、そして内戦が人々の生存基盤に及ぼす危機とはどのようなものか、という問いを明らかにすることである。シリア内戦は、現代シリアにおいて蓄積してきた構造的な矛盾が、中東域内外の国際政治の変容と相互に結びつき、暴力的に顕在化したものだと考えられる。よって、国際関係も含めた包括的な視点からその構造的要因を分析する必要がある。また、内戦によってシリア国民の半数以上が家を追われ、子供たちへの教育や人々の健康面に深刻な被害をもたらしている。内戦が人々の生存基盤に及ぼしているそうした危機を物質的精神的な側面から指摘し、人々がどのようにその危機を乗り越えようとしているかを明らかにすることを通じて、内戦終結後の社会への希望を探りたい。

フィールドワークから得られた知見について

昨年と同じくシリア隣国のヨルダンにて、2 度目のフィールドワークを行った。ヨルダンには 60 万人以上のシリア人難民がおり、その多くはアンマンなどの都市部に居住している。今回の主な目的は、ヨルダン大学にてシリア内戦・難民関係の資料を収集することと、昨年からの状況の変化の有無を確認することであった。それに加えて、新たな難民家庭の訪問と、労働者としてヨルダンに避難してきたシリア人の調査も行った。

今回新たに訪問した難民家庭での聞き取りからは、国連からの支援が減少してますます生活が厳しくなっていることや、近くに住む親族やヨルダンで知り合ったシリア人との限られたコミュニティの中で暮らしていることなどがわかった。

シリア人労働者の調査は、ヨルダン大学近くの飲食店が立ち並ぶ大通りで行った。そこでは 2011 年以降、シリア系の飲食店がいくつも出店しており、難民としてではなく労働者としてヨルダンに避難してきたシリア人も多くいるようであった。

今回の調査からは、同じアラブ社会であっても異なる社会環境下での人間関係の構築は想像以上に難しく、その中ではシリア人同士のコミュニティが大きな役割を果たしていることがわかった。また、支援を受けたり新たな土地で働く姿から、ヨルダン社会においてシリア人たちが自らの生存戦略を模索する様子的一端を捉えることができた。

今後の展開・反省点

今回の調査では、これまでの難民に対する調査に加えて、シリア人労働者に関してさらに調査すべき課題が見つかった。調査で得た情報から、ヨルダンで働くシリア人はますます増えていると思われるので、より踏み込んだ調査を行っていきたい。さらに、政府による厳しい制限の下で、生計を立てるために違法に働かざるを得ない難民も多くいると思われるが、そのような人々に対する調査をどのように行うかという点が大きな課題である。今後の展開として、ヨルダン以外の国々におけるシリア人難民・労働者の現状とその生存戦略についても調査を行い、より包括的な視点から問題を捉えたいと考えている。



(写真 1 : ヨルダン大学近くの大通り)



(写真 2 : シリアの菓子店)



(写真 3 : 菓子店内)